The Japanese Association for Environmental Sociology

負の歴史的遺産における生活実践の伝承可能性

——ハンセン病療養所におけるアートプロジェクトを事例として——

宮本　結佳
（滋賀大学）

近年，多様な建造物群や自然景観，歴史的景観を保存し，広く公開しようとする動きが活発化しており，その中でもとくに戦争，災害，公害，差別といった否定的記憶を伝承する負の歴史的遺産への関心が高まっている。歴史的遺産の中には多様な要素が含みこまれており，その中のどこに光をあてるのかを争点とする議論が活発化している。本稿では，差別をめぐる負の歴史的遺産であるハンセン病療養所を事例として取り上げ，この点について検討を行う。

ハンセン病療養所をめぐる先行研究においてはこれまで「被害の語りが圧倒的に優位な立場を確立することで，そこに回収しきれない多様な語りが捨象されてしまう」点が問題として指摘されてきた。ハンセン病療養所の保存・公開においては「被害の語りが優位になる陰で捨象されがちな主体的営為をいかに伝えていくのか」が問われているのである。本稿では香川県高松市大島のハンセン病療養所における食をテーマとするアートプロジェクトを媒介とした保存・公開活動を事例として，この問いを検討した。活動の軸の１つである，大島を味わうことをテーマとしたカフェシヨルにおける取り組みの分析を通じ，そこでは楽しみを伴う主体的営為としての食をめぐる複数の生活実践が巧みに表象されており，従来捨象されがちであった入所者の多様な経験が継承されていることが明らかになった。人々によって紡ぎだされる物語が多様であることを鑑みれば，アートプロジェクトを含めたさまざまな手段を媒介として主体的営為を表出する取り組みを活発化させることが可能であると考えられる。

キーワード：負の歴史的遺産，歴史的環境，ハンセン病療養所，アートプロジェクト

1. はじめに——遺産化現象の隆盛

炭鉱や造船所，製糸場などの近代産業に関連する遺産や，地質や自然景観といった自然に関する遺産，また昭和30年代の町並みと呼ばれるような比較的近い過去の身近な暮らしに関連する遺産など，これまでは地域に残る遺産として意識される事が少なかった建造物群や自然景観，歴史的景観を保存し，広く公開しようとする動きが近年活発化しつつある。

現代は，従来保存の対象として法律で定められてきた文化財という枠にとどまらず，生活様式，技術や芸能，自然物や景観，人間の所業や出来事，災害の痕跡や記憶にいたるまであらゆるものが文化遺産(1)となりうる時代であり，そこでは可能なかぎり網羅的に共有の遺産としてさまざまな体験と文化を保存することが試みられる（小川，2002；荻野，2000）。荻野昌弘の言葉を借りれば，あらゆるものが遺産となる「遺産化現象の加速化」（荻野，2002）が急速に進んでいるのである。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for Environmental Sociology

多様な遺産の中でもとくに近年，近代化産業遺産および負の歴史的遺産への注目が高まりつつある。典型的な近代化産業遺産であり，2014年にユネスコの世界文化遺産に登録された富岡製糸場や，15年にユネスコの世界遺産委員会によって世界文化遺産への登録決定がなされた九州・山口を中心とする明治日本の産業革命遺産には，メディア報道等を契機に多数の観光客が訪れるようになり，ヘリテージツーリズムと呼ばれる新たな観光の形態が模索されている。地域資源を活用した観光に取り組むことで地域振興をめざす動きは各地で活発化しており，このような社会的潮流は今後も継続していくことが予想される。一方，近代化産業遺産という日本の発展過程を象徴する遺産とは逆の立場にある，戦争やさまざまな災害，公害や差別といった「近代史の否定的側面を示す」（荻野，2000）負の歴史的遺産の保存をめぐる動きも同時に各地で生起している。2011年の東日本大震災以降，福島第一原発事故の記憶のアーカイブ化や被災者自身による被災地の自主的な案内（東，2013；渡邊，2013）など災害に関する遺産をめぐる活動がさかんになりつつある。

さらに前述の災害にとどまらず，近年では差別をめぐる負の歴史的遺産である，ハンセン病療養所の保存と公開をめぐる動きも活発化している。2009年に施行されたハンセン病問題基本法において，療養所施設の地域開放や歴史的建造物の保存がうたわれ，各療養所で地域開放をめざした将来構想がまとめられる(2)と同時に，14年の栗生楽生園における重監房資料館開館のように療養所内の施設を保存し，資料館として広く公開する動きが進められている。こういった，災害や公害，差別といった人類の負の足跡をたどる（井出，2013）ダークツーリズムと呼ばれる観光のあり方も，先のヘリテージツーリズムと同様，徐々にそのかたちが模索されつつある。

このような社会状況の変化と軌を一にして，社会学分野においても1990年代後半から歴史的環境という概念が提唱され，有形・無形の歴史的遺産が集中して存在することでつくり出される一定の場を幅広く対象とする研究が増加している（片桐，2000ほか）。これまで保存・公開の対象とされてこなかった遺産に大きな注目が集まり，ツーリズムというかたちでそこに多くの人々が訪れるようになったとき，その保存と公開をめぐっていったい何が課題となってきたのだろうか。次節では，この点について詳しく見ていくこととしたい。

2. 本稿の問題関心

2.1. ヘリテージツーリズムの興隆に伴って生起する問題

1つひとつの遺産は，つねに肯定・否定どちらかの側面だけをもつ単純な存在であることは少ない。しばしば1つの遺産の中には多様な要素が含みこまれており，その中のどこに光をあてるのかを争点とする議論が活発化しつつある。前節で，遺産の公開に伴って外部から人々が訪れる各種ツーリズムの興隆が見られることを確認したが，産業遺産においてはこのツーリズムの興隆によって起きる次のような問題が指摘されてきた。それは観光化が一種の消毒作用を伴うため，そこでは日本の産業化を牽引した栄光や威容などの肯定的な側面のみが提示され，過酷な労働環境や環境被害といった否定的な側面が消されてしまうという点である（荻野，2000；2002）。端島炭鉱（軍艦島）の産業遺産としての表象を研究した木村至聖は，表象の形態としてとりうる選択肢の1つに「近代化の礎としてのナショナルな物語」という肯定的な側面を強調する戦略を挙げ

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for Environmental Sociology

ているが，同時にそれが負の記憶を含めた多様な経験を削ぎ落としてしまう危険性も指摘している（木村，2009)。2015年に端島炭鉱（軍艦島）が明治日本の産業革命遺産の1つとして世界遺産への登録勧告を受けた際に，韓国から徴用工問題をめぐって登録への反発が起こったことは記憶に新しいが，これは木村の危惧が現実のものとなっていることを示している。産業遺産の保存，公開においては肯定的側面が強調されることで否定的側面が消毒されてしまうことが問題視されてきたのである。

2.2. 負の歴史的遺産の保存・公開をめぐる課題

一方，負の歴史的遺産においては，そもそも災害や差別といった否定的側面への注目が遺産化の出発点となっている。そのため，産業遺産とは異なり，負の側面が削ぎ落とされるという問題に直面する可能性は低い(3)。それでは，負の歴史的遺産の保存と公開をめぐって，「多様な要素の中でどの点をクローズアップするのか」という表象をめぐるせめぎあいがないかと言えば，けっしてそうではない。そこでは消毒作用とは異なる点が新たに課題として浮かび上がってくるのである。以下では，本稿が事例とする負の歴史的遺産，ハンセン病療養所をめぐる先行研究において何が課題として指摘されてきたのかを見ていきたい。

2001年，長期にわたって続いてきた隔離政策の誤りを問うらい予防法違憲国家賠償請求訴訟に対し原告勝訴の判決が出されたことを契機として，隔離をめぐるさまざまな問題が広く社会に認知されることとなった（青山，2014；坂田，2009)。社会的関心の高まりを反映して，社会学分野でもハンセン病療養所に生きる人々を対象とする研究の蓄積が進んでいるが，そこに共通して見られるのはハンセン病者の「生の多様性・複数性に照準し」（有薗，2008a)，生活の場である療養所の中で生きられてきた生の豊かさや主体性，そこでの生活活動がもたらす創発性や文化形成に注目する分析視点である（青山，2014；有薗，2008a；2008b；桑畑，2013；坂田，2009；2014)。これらの研究は被害や人権侵害という表現によって一様に説明し尽くされるものではなく（有薗，2008a)，差別を告発する権力闘争に還元できないハンセン病者の営みの広がり（坂田，2009）に注目してきたのである。

近年，こうした視点に立つ社会学分野の研究から，らい予防法違憲国家賠償請求訴訟によって広く流布することとなった「被害の語り」がはらむ問題点が指摘されている。それは，被害の語りが圧倒的に優位な立場を確立することで，そこに回収しきれない多様な語りが捨象されてしまうという点である。議論の前提として確認しておくが，この指摘はけっしてらい予防法違憲国家賠償請求訴訟そのものの否定を意味するのではない。これまでハンセン病者が自らの経験を社会問題として表象し流通させる手段をもつことができなかった状況の中で，訴訟は彼らが自らの経験を他者へ向けて語り始める重要な契機となった。そこで被害の語りが反復されることを通じて彼らの被った苦難が社会争点化され，ハンセン病者の経験が隔離政策の被害として位置づけられたことが重要な社会的意義をもつという点については共通の了解がある（青山，2014；有薗，2008a；2008b)。

一方，訴訟ではその戦略上隔離被害に焦点があてられ，それに沿った運動の枠が形成された。入所者にとって運動の中で被害と向き合い，被害者として自己を呈示することは自己の無力さを提示することでもあった（青山，2014)。そのため，入所者から個々の経験が「被害」としてひと

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for Environmental Sociology

くくりにされることに対して違和感が表明され，被害のほかにも語るに値する経験があるというメッセージが発せられるようになる（有薗，2008b）。

有薗昌代は，（自ら仕事の場をつくりだしていくという）入所者たちの日常的実践[4]における主体的営為の語りに着目し，こういった実践の経験が彼らの現在を支えている（自己存在の肯定を支えている）こと，だからこそ被害の枠に収まらないこのような経験もハンセン病者の歴史の重要な側面の１つであることを指摘する。そこで問われているのは，被害の枠に収まらないものも含めた，ハンセン病を患った人々から紡ぎ出される多様な物語をどのように残していくのか――彼らの生きてきた証をしるすバトンをどのように受け渡すことができるのか――という点である（有薗，2008b）[5]。

このような被害の枠に収まらない，多様な生のあり方をどのように描き出していくかという点は，公害被害を環境社会学の視点から分析する研究においても問われてきた。たとえば，関礼子は新潟水俣病の調査を通じて次の点を指摘している。裁判において，被害者は被害者としてのみ存在し，地域の生活者であるという視点は捨象される。しかし，患者は苦痛のみだけではない日常を暮らしており，被害者が生活者としての言葉で表現できる「身の丈の水俣病」を見据えていくことも重要である。関は，この点をふまえて水俣病の教訓化を考えたとき，水俣病を地域の日常の中から捉えなおそうという視点をもち，地域の中の対立や葛藤を超えて関係性を修復しようとする「水俣病被害者運動という地域づくり運動」に可能性を見出している（関，2003）。

関の被害者に対する分析視点は，調査対象は違えど有薗の指摘と共通する部分がある。一方で，記憶・経験をどのように伝承するのかを考えたとき，ハンセン病問題は公害被害とその条件が異なる部分がある。療養所では断種，堕胎手術が行われ（桑畑，2013）入所者たちは子どもをもつことがかなわなかったという事情から療養所の人口は減少の一途をたどっており，いずれそこに住む人がいなくなる時期が到来する。そのため，療養所に住む人々が今後もずっと伝承の担い手となるのは不可能な状況である。この点をふまえると，入所者の高齢化が急速に進む中でハンセン病を患った人々の多様な経験をどのように伝えていくのかを検討することは喫緊の課題であると言える。

現在，瀬戸内３園（長島愛生園・邑久光明園・大島青松園）を中心にハンセン病療養所の世界遺産登録をめざす動きも活発化しており，ハンセン病療養所施設という負の歴史的遺産の保存・公開において「被害の語りが優位になる陰で捨象されがちな主体的営為をいかに伝えていくのか」という問いは重要性を増している。この問いは本特集のテーマ「環境社会学のスコープ――環境の時間／社会の時間」に引きつけて言えば次のように言うことができるだろう。ハンセン病療養所という負の遺産は近年の保存・公開という流れを受けて，入所者が誰１人いなくなった後も長期にわたって存在することとなる。そのため負の歴史的遺産という歴史的環境に流れる時間は相対的に長いスパンで考えられるものである。この歴史的環境の時間の中に，いかにして（歴史的環境の時間と比較すれば相対的に短い）入所者によって生きられてきた時間の多様性を含みこませることができるのだろうか。

本稿では国内に13ある国立ハンセン病療養所の１つ，大島青松園における食をテーマとするアートプロジェクトを媒介とした記憶の保存・公開活動を事例として，この問いを検討していくこととしたい。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for Environmental Sociology

3. 大島青松園におけるアートプロジェクトの展開過程

3.1. 瀬戸内国際芸術祭における大島の位置づけ

香川県高松市大島にあるハンセン病療養所大島青松園[6]は，1909年に岡山・広島・山口・島根・徳島・香川・愛媛・高知の8県連合立療養所「第4区療養所」として発足し，46年に現在の名称である「国立療養所大島青松園」へと改称された。南北約1,500 m，東西約600 mの島の大部分は国有地である。高松市沖の島という立地上，船舶が大島と高松との間を結ぶ唯一の交通機関であり，現在2隻の官有船が入所者や通勤者，施設見学者を運んでいる。

これまでアートとは特段縁のなかった離島の療養所にアートプロジェクトが展開することとなったきっかけが2010年から3年に1度実施されている瀬戸内国際芸術祭（以下芸術祭）である[7]。芸術祭は瀬戸内の島々を会場に，アートを媒介として地域の資源を発見し，それが設置される場所に光をあてることをめざしてはじまった取り組みである。芸術祭開催にあたっては，産業廃棄物問題に揺れた豊島や，ハンセン病療養所の所在地となってきた大島など近代化の負の遺産を抱えた島々を会場とする姿勢が打ち出され，やさしい美術プロジェクトというグループによる取り組み「つながりの家」が実施されることとなる。

3.2. やさしい美術プロジェクト「つながりの家」

やさしい美術プロジェクトは，2002年に発足した名古屋造形大学の教員と学生によるグループである[8]。やさしい美術プロジェクトは，病院利用者とのコミュニケーションや病院が立地する地域文化を生かして「文化を発信する地域に開かれた病院の創出」をめざして愛知県や新潟県で活動を行ってきた。07年に，芸術祭のディレクター北川フラム氏から，やさしい美術プロジェクトメンバーの高橋伸行氏に声かけがあり，高橋氏が大島に通いはじめたことから，大島青松園において「つながりの家」と呼ばれる活動が展開されていくこととなる。

「つながりの家」は，次にあげる3つの活動が主軸となって行われた。第1に，入所者が暮らしてきた一般独身寮15寮を活用した展示スペース「GALLERY15」，第2に，大島を味わうことをテーマとしたカフェ「カフェシヨル」，第3に，芸術祭のボランティアであるこえび隊のメンバーによる来訪者向けの「ガイドツアー」である[9]。そこでは，入所者によるさまざまな生活実践が表象されていくこととなる。

活動の詳細を記述するのに先立って，ここで本稿における生活実践の定義を確認しておきたい。桑畑洋一郎は，ハンセン病者の実践を制約的な状況下で生活を切り盛りするためになんとかやっていくことを一義的な目的としてなされるものであると指摘している。そのうえで，生活を切り盛りしていくことを目的とした――しかしさらなる意味ももちうる――実践という意味合いで「生活実践」という概念を提唱している。桑畑は戦後復興期における沖縄愛楽園の調査を通じて，この生活実践の様相を具体的に明らかにしている。そこでは，ほぼ廃墟と化した療養所において入所者が自らの手で住生活を再建した過程や，さまざまな手段を活用して食糧等の物資を調達していった様子が詳細に描き出されている（桑畑，2013）。本稿では桑畑による「生活実践」の定義を援用して議論を進めていく。「生活実践」は有薗のいう「日常的実践」と定義のうえで重なる

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for Environmental Sociology

部分が大きく，ほぼ同義の意味で使用されていると言ってよいだろう。

次節では，入所者による食をめぐる実践が取り上げられたカフェシヨルに焦点をあて，そこでいったいどのような営みが想起され伝えられることとなったのかを確認していきたい。

4. カフェシヨルにおける生活実践の表象

4.1. 食をめぐる生活実践への注目――おかしのはなし(10)

やさしい美術プロジェクトのメンバーであり，「つながりの家」のディレクターである高橋氏は2007年以降大島に泊りがけで通い，入所者の人々との関係を深めていった。その中で，自分が島のことをまったく知らなかったこと，島のことが外には知られていないことに気づき，「自分が何かここに作品を作るのではなく，ここにあるものを外側に見せていくことをやらなくてはいけない」と考えるようになる(11)。高橋氏のこの思いを出発点に，やさしい美術プロジェクトのメンバーたちによって前述の3つの活動が企画されることとなる。

ここで本節において取り上げるカフェシヨルの概要について簡単に紹介しておきたい。「シヨル」という店名は香川の方言に由来する。香川では「～している」を「しよる」と言い，この方言がそのまま店名になっている。シヨルの建物は新築ではなく，もとは第二面会人宿泊所と呼ばれる施設で，入所者との面会のために島を訪問する家族などが宿泊するために使用されていた。2009年の時点で第二面会人宿泊所はほとんど使用されておらず，この第二面会人宿泊所を改装して作られたのがカフェシヨルである。改装にあたっては古い壁材をはがして漆喰が塗られ，大島の浜をビーチコーミングして拾ったガラスや入所者が浜に埋めた陶器のかけらが壁面に装飾された。また，陶芸を特技とする入所者の指導のもと大島で採れた陶土を使った大島焼の器が製作され，カフェシヨルではほぼすべてのメニューを大島焼の器で味わうことが可能となっている。

カフェシヨルの運営を担当することになったのは，やさしい美術プロジェクトのメンバー，泉麻衣子氏と井木宏美氏の2人である。ここではまず，泉氏を中心して実施された，菓子「ろっぽうやき」再現の取り組みについて見ていく。泉氏は「つながりの家」の取組み以前からやさしい美術プロジェクトに参加し，病院内における作品作りに取り組んでいた。これまでの作品制作にあたっては，まず入院患者にインタビューを行い，インタビュー内容をもとに作品プランを考えるという方法をとってきたため，大島でも同様に入所者へインタビューを重ねていくことになる。

当初，泉氏がインタビューでしばしば聞くこととなったのは，歴史的な事実や，辛かったことなど被害についての経験であり，日常の暮らしを感じるエピソードはなかなかでてこなかった。その後インタビューを続けていく中で徐々に生活感を感じるエピソードが現れるようになり，その中でとくに人々が柔らかい表情で語ったのが，療養所内の加工部で製造されていた菓子「ろっぽうやき」をめぐる話しであった。ろっぽうやきとは和菓子の1種であり，サイコロのような立方体の饅頭で六面が焼き上げられており中にあんこが入っている。入所者たちが自らとろっぽうやきとの関わりついて熱心に語るのを目のあたりにした泉氏は，プロジェクトにおいてろっぽうやきの復刻をめざしていくことを決める。同時期にプロジェクトメンバーの井木氏は島でカフェの運営を検討しており，食をめぐる取り組みという点でのつながりから共同で運営にあたることが決まり，ろっぽうやきはカフェのメニューの1つとして提供されることとなる。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for Environmental Sociology

ろっぽうやきの復刻においては当時の加工部で製造に関わった人々や製造の様子を見ていた人々から製法について詳細なアドバイスがなされた。

> 私は手伝いに行ったことがあってな。……うちの寮から加工に行っている人がおったから。ちょっと手伝ってくれませんかと。……そこで見たことを（シヨルの2人に伝えた）[12]。作っとったんはほぼ真四角というかね，横の方から見るとね……厚みがあってね，中はこしあんだからね。皮が3ミリくらいの厚さはあったかな。そうとう作りよったんじゃないかな，何百とも。……だって1人が何十個も頼むんだから。……鉄板の上で返しよるうちにね最初は丸いやつでも返していくと四角くなるんですよ。ほぼ[13]（カッコ内は，筆者加筆）。

前述の通り，ろっぽうやきの復刻をめざして泉氏が聴き取りを行っていく過程で，入所者たちによって菓子の製造，販売をめぐるさまざまな実践が想起されていくこととなったのである。

ろっぽうやきは戦後材料が手に入るようになった昭和20年代後半から昭和50年代まで，療養所に入る前には菓子職人だった入所者を中心に加工部で作られており，現在の入所者の大多数がその味をよく知っている。自治会（共和会）が発行する機関誌『青松』では1968年2月号に「まんじゅう屋繁盛記」という記事が掲載されており，製造風景の写真とともに加工部の様子が次のように描かれている。

> 園内のまんじゅう屋こと自治会購買部直営の加工部は近頃大いに繁盛している。主任のKさんと部員3名で1ヵ月に十日余り開業している。……Kさんは入園する以前からまんじゅう屋が本職で，加工部で作られるまんじゅうの品質は外部から入ってくる物におとらず安くて，うまい。……店は古くてもそこで作られるまんじゅうは安くてうまいので大いに繁盛している。

入所者の間でろっぽうやきの評価は高く，「加工部が，作りますよ，欲しい人は注文してくださいと言えばみんなが頼んでいた」[14]人気商品だったのである。

また大島青松園，邑久光明園，長島愛生園の瀬戸内3園では友園交歓という交流がなされており，入所者は各療養所の友人を互いに訪問しあっていた。その際にもろっぽうやきは人気のお土産であり，他園の友人たちから「今度くるときは良かったら20ほど持ってきて」と依頼されるなど大島名物のような存在であった[15]。こういったエピソードから，園内外を問わず評判が高かったろっぽうやきを入所者自身が作っていたという実践は，入所者たちにとってポジティブな思い出として記憶されていることがわかる[16]。そのため，復刻したろっぽうやきは入所者の間で人気を博し，一般向け営業を実施しない日に島内限定で2日間のみの販売を行った際に230個を売り切ったという記録がある（高橋，2010c）。

泉氏はろっぽうやきを再現する過程における入所者の語りを同時に映像に記録し，GALLERY15における企画展「大島に暮らす」展の中で展示した[17]。さらに再現されたろっぽうやきに，おかしのはなしという焼印を押して提供し，ろっぽうやきにこめられた記憶を，味を共有することを通して伝えるこころみ全体を「おかしのはなし」と名付けている（泉，2015）。ろっぽ

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for Environmental Sociology

うやきを食べた来訪者は，映像作品を視聴することで，その製造過程や，そこに込められた思いを知ることとなる。

「おかしのはなし」において再現されたろっぽうやきは，食をめぐる主体的な実践を表象するモノであったということができるだろう。

4.2. 農産物の生産をめぐる共同性の表象

カフェシヨルでは，ろっぽうやき以外にも大島で収穫される果実や野菜を使用したさまざまなメニューが提供されているが，それらは入所者たちが趣味耕地で栽培・収穫したものがおすそ分けされたものである。カフェでは○○さんの春菊，水菜，○○さんの白菜といったかたちでメニューボードに生産者名が示され，来訪者は自分が食べている野菜や果実を誰が作ったのかを知ることができる[18]。以下では，趣味耕地で収穫された野菜や果実がカフェに提供され，生産物が来訪者との間で共有される意味について考えていきたい。

戦中戦後の食糧難の時代，耕作地における食糧生産は，自治会が耕作権を買い取って農耕作業者を指定し，厳重な供出制度を設けるというかたちで実施されてきたが，食糧事情の改善に伴いその必要はなくなり，1954年に耕作地は趣味耕地として希望者に分配されることとなる（国立療養所大島青松園，1960）。

趣味耕地[19]での耕作は人気を博し，多いときには250人余りの人々が参加し，1人畳6〜7枚のスペースで農作物作りに精を出した。自治会機関紙『青松』1968年12月号には耕作地で農作業をする入所者の写真が掲載され，夏作物として西瓜，メロン，ナス，トマト，南瓜，胡瓜，ピーマンなど，秋作物として白菜，ネギ，大根，かぶ，人参，キャベツ，カリフラワー，ごぼうなど多様な農作物が栽培されていることが記述されている。耕作地が趣味耕地として開放された翌年である1955年10月の『青松』には「私たちの一番開放的な楽しみの1つに趣味耕地と云うのがある。……限られた生活範囲に，がぜん趣味耕地は私たちの娯楽場，社交場，運動場となったのである」という記載が残っており，趣味耕地の人気ぶりの一端が垣間見える。その後『青松』1974年12月号の中でも「物を作り育てると云うことは楽しみなものである」と記述されており，耕地の開放からある程度の時間が経過しても，耕作が熱心に行われていたことがわかる。趣味耕地となってからはとくに西瓜の栽培がさかんに行われ，毎年7月には品評会が開催され互いにその腕を競いあった。最盛期には1年に8万キロの西瓜が収穫されたともいわれており，趣味耕地で西瓜を作っていない人も，食べ飽きるほど貰ったり，ご馳走されたりしていた。さらに，西瓜のみならず，トマトなどさまざまな農作物が生産者から人々におすそわけされており，喜ばれていたという。ここからは，野菜や果実を作り，他者とそれを共有することは楽しみを伴う生活実践と認識されていることが読み取れる。

体調の問題などから，趣味耕地での耕作ができない人々にとって入所者仲間からおすそ分けされる農作物は大切な品であった。目の見えないF氏は，体調を崩して食事がほとんど喉を通らなかったとき，島内で作られた西瓜は食べることができ，それを知った友人たちが畑で作った西瓜を次々届けてくれたという（ベッドの下にはいつも3つ4つ大きな西瓜の玉がころがっていたそうである）。その後食べられる西瓜の量はだんだん増え，最終的には普通に食事ができるようになった。F氏は危ういところを西瓜によって息をつないだと語っている[20]。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for Environmental Sociology

前述の通り大島でさかんに作られてきた西瓜はカフェシヨルにおいては，ドリンクに入れる西瓜氷やシャーベットとなって人々を楽しませた。高齢化に伴って畑を耕す人は年々減少しているが，シヨルに定期的に農作物が届ける入所者たちがおり，彼らからは「おいしいって言ってくれる。ありがたい」(21)という声が聞かれた。また，カフェと連動するかたちで，GALLERY15において畑作業における入所者同士の声掛けの様子が作品として展示された。「大智×東條展」と題されたこの展示では，入所者同士が掛け合う声が精密な録音機器で記録されギャラリーの空間全体に音響が再現された。作家である高橋氏は，島に泊りがけで通う中でこの声に出会い，この声を記録する必要を感じたという。ここでは生き物と風の息吹を含めた空間を録り，聞きながら目を瞑ると情景が見えていく空間がギャラリーに再現されることがめざされた(22)。現在では耕作者もずいぶん少なくなったが，数百人の耕作者がいた全盛期には農繁期ともなればいたるところで何人かが寄合い，大げさな言葉も飛び出してその応酬が島畑の壁から壁に伝わり，向こうの壁からも応酬がきていっそうにぎやかになったという(23)。この作品を通じて，来訪者たちが趣味耕地における生産の様子を知ることができる仕掛けが作られていたのである。

療養所における農産物の生産・分配・共有をめぐって，青山陽子は次の点を指摘している。多磨全生園の耕作地（慰安畑）において，耕作者が収穫物を独占することはまれであり，多くの耕作者は他の人々へおすそ分けをして歩いた。青山はここに「平等の論理」を見出し，この患者社会固有の論理が彼らの共同性を支えていたことを指摘する（青山，2014）。

青山が取り上げた事例と大島青松園の事例は，「個人が権利をもつ耕作地で生産された収穫物がおすそ分けのかたちで広く共有されていた」という点で共通しており，大島青松園においても，農産物の生産をめぐる共同性が発露しているということが可能であろう。

現在，入所者仲間へのおすそ分けからカフェへの提供にそのかたちを変えてはいるが，収穫物を独占せず，他者と共有する（カフェの場合，来訪者との共有）という，農産物の生産をめぐる共同性がそこには表れていると言えるだろう(24)。

4.3. 楽しみを伴う主体的営為としての食をめぐる生活実践

4節における議論をまとめておこう。カフェシヨルにおいては「大島を味わう」というコンセプトの元，加工部で製造されてきた菓子であるろっぽうやきの復刻販売と，趣味耕作地で収穫された果実，野菜を使用した料理の提供がなされた。ろっぽうやきの復刻がめざされた契機は，やさしい美術メンバーの泉氏が，お菓子をめぐる入所者の語りが，被害の語りとは異なる日々の暮らしを表出させるものであることに気づいた点にある。泉氏が入所者の語りから見出したのは，被害・苦しみを受けた受動的存在という枠に収まりきらない，食をめぐる楽しみを自ら作り出しながら日常生活を送る人々の姿だった。同時に，これまでの経緯から果実，野菜を生産し他者と共有する過程もまた人々から楽しみを伴う日常的実践として捉えられていたことがわかった。2010年のろっぽうやき販売をきっかけに，加工部で製造されていたその他の菓子類についても復刻が進められ，当時の製造方法などの丁寧な調査を経て13年には加工部のもう1つの人気商品であったくりまんじゅうもカフェシヨルで販売されるようになった。

カフェシヨルにおける取り組みでは，いずれも楽しみを伴う主体的営為としての食をめぐる生活実践が表象されており，従来捨象されがちであった「被害以外の語るに値する経験」がそこで

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for Environmental Sociology

は継承されていると言える。だからこそ，入所者自身がろっぽうやきの購入や収穫物の提供といったさまざまなかたちでカフェシヨルに積極的に関わっているのではないだろうか。2010年以降，出張シヨルと題して園内のバリアフリー施設において入所者限定の営業も実施され，多くの入所者がカフェシヨルのメニューを楽しんだ。

小坂有資は，やさしい美術プロジェクトの調査の中でカフェシヨルの活動が飲食を通して入所者の身体知を継承する活動であることを指摘しているが，その活動は大島でかつて使用されていた解剖台の展示や歴史的事実を解説するガイドツアーという被害を表象する取り組みと同列に併記して論じられており，それぞれの活動の特性（被害を表象しているのか，そうでないのかという点）はとくに区別されていない。本稿では小坂の指摘に加えて，カフェシヨルの取り組みにおいては楽しみを伴う主体的営為が表象されており，「被害以外の語るに値する経験」がそこでは継承されていることを指摘しておきたい（小坂，2014）。

また，島外からの来訪者が高橋氏に対して語った「ハンセン病の療養所は辛くて悲しい歴史そのものだけれど，実際に大島に来てそれだけではない，何かを感じた」という言葉は，シヨルを通じて伝えられる「被害以外の語るに値する経験」を来訪者が受け取ったことにより発せられたと考えることができるだろう。高橋氏は，「歴史の年表には載らない，生き抜く力のドラマが1人ひとりの入所者の記憶の中にある」と語り「ハンセン病回復者とひとくくりでは決して見えてこない……人間の生き様にふれること」の重要性を指摘している（高橋，2010b）。

5. 結　語

本稿では，大島青松園で実施されているプロジェクト「つながりの家」を事例として取り上げ，負の歴史的遺産であるハンセン病療養所において，被害の語りが優位になる陰で捨象されがちな主体的営為をいかに伝えていくのかを検討してきた。

青山も指摘する通り，資料館という設備における展示の中では，らい予防法違憲国家賠償請求訴訟を契機にクローズアップされた，隔離政策の誤りと被害の諸相が強調される。そこでは，入所者たちの生の多様性は大幅に縮減されざるをえない。一方，食をめぐる生活実践を伝えるカフェシヨルの取り組みは，被害とは異なる入所者たちの経験を浮かび上がらせ，入所者たちのさまざまな経験が被害のみに還元されてしまうことを巧みに回避している[25]。

1節でも記述の通り，現代は，ありとあらゆるものが文化遺産となりうる時代である（小川，2002；荻野，2000）。小川伸彦は，遺産化するとは保存し公開・展示する事と言い換えることが可能であり，保存に際しては「過去」に属する事物の存在意義を「現在」という保存の時点において一定の基準に基づいて解釈し意味づける作業が行われていると述べている。そのうえで，保存の営みがなされた時点における価値観がそこに保存されているという視点の重要性を指摘している（小川，2002）。

それでは，この小川の指摘をふまえてカフェシヨルの取り組みを考えたとき，浮かび上がってくるのはいったいどのような点だろうか。特徴として挙げられるのは，カフェシヨルの取り組みを通じて，入所者たちが存命であり，自らの経験・意味づけを語ることが可能な現時点において，入所者自身が自らの生きてきた時間をどのように捉え，それをどのように伝えようとしているの

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for Environmental Sociology

かを残すことが可能となっているという点である。

カフェシヨルの取り組みを通じて保存の営みがなされた時点（＝入所者たちが存命で，語ることが可能な現時点）における入所者たちの価値観がハンセン病療養所という歴史的遺産に含みこまれたということができるだろう。高齢化が進む中で，将来的には入所者がいなくなる時期が到来するが，食をめぐる生活実践の伝承の中に，入所者たちの経験・価値観は保存されていくことになる。1人ひとりの記憶の中には経験が豊かに残されているが，主体的営為を表象する取り組みが媒介することによって初めてそれは消えることなく伝えることが可能になる。

2014年時点で大島青松園の入所者数は80人にまで減少しており，子どもをもつことが許されなかったという事情もあって，将来的には療養所から入所者がいなくなる時期が到来する。入所者がいなくなった後もハンセン病療養所は負の歴史的遺産として保存・公開が続けられていくことになるが，その中で食をめぐってなされた生活実践が語りつがれ，カフェのメニューというモノを媒介として入所者たちの楽しみを伴う主体的営為が表象されることで，負の歴史的遺産という歴史的環境の長い時間の中に，入所者によって生きられてきた時間の多様性の一端を含みこませることが可能となる。

本稿で扱った事例では食を対象とするアートプロジェクトが主体的営為の伝承を可能としたが，人々によって紡ぎ出される物語が多様であることを鑑みれば，主体的営為の表出を媒介するものもまた多様であってよいと考えられる。おもに資料館において展開する「被害の語り」と並列するかたちで多様な手段を媒介として主体的営為を表出する取り組みが活発化することで，彼らの生きてきた証をしるすバトンを豊かに受け渡すことが可能になるのではないだろうか。

注

(1) 小川（2002）において，文化遺産という言葉はユネスコの世界遺産条約における文化遺産という狭義の概念ではなく，自然環境や記憶といったものも含む広義の概念として使用されている。

(2) 『朝日新聞』2009年4月18日朝刊「ハンセン病問題基本法施行再出発の春道険し」『山陽新聞』2011年5月12日朝刊「回復者たちの今 ハンセン病熊本地裁判決10年」より。

(3) ただし，時間がたつにつれて負のイメージが消されていく可能性を完全に否定することはできない。荻野は網走刑務所を例に挙げ，観光地化が進む中でテーマパーク化が加速する可能性を示唆している（荻野，2000）。

(4) 有薗は，療養所内で日常的かつ集団的に行われてきた活動に着目し，療養所生活を少しでもましなものにするために試みられてきた諸活動を「日常的実践」と呼んでいる。日常的実践という言葉の中には人間の行為を状況への働きかけとして見る点とそれによって社会的世界が変化する契機を見出そうとする点に特徴があると指摘されており（有薗，2008b），本稿でこの用語を用いる際は有薗による定義を援用する。

(5) 青山は多磨全生園内にある国立ハンセン病資料館のリニューアル前後の展示企図の違いを分析することを通じて，資料館で展示される歴史が患者集団の記憶に基づかない過去へ，国家の出来事（＝人権侵害としてのハンセン病政策）という過去に向けて流れ出したことを指摘する。入所者にとって各療養所から集められた，自分たちとのつながりがわかる展示品であふれた旧資料館は自分たちの経験そのもの，生きてきた記憶のかたちであったが，それが新資料館においては失われたのであり，入所者はこの点を残念に思っている（青山，2014）。これも，ハンセン病療養所の保存と公開の過程において当事者たちの多様な経験の表象が失われていく出来事の1つだと言える。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for Environmental Sociology

(6) 大島青松園の概要については（国立療養所大島青松園創立百周年記念誌編集委員会編，2009）をもとに筆者が再構成した。

(7) 瀬戸内国際芸術祭の概要については（北川監修，2010）をもとに筆者が再構成した。

(8) やさしい美術プロジェクトの概要については（高橋・井口編，2010），やさしい美術プロジェクトによる報告書「やさしい美術平成22年度大島での取り組み活動報告」をもとに筆者が再構成した。

(9) 2013年の芸術祭開催時にはカフェシヨル，GALLERY15，ガイドツアーに加え入所者が暮らしてきた一般寮に「大島資料室」が開設された。そこには入所者が使用していた品々が展示された。また入所者の蔵書を集めた「北海道書庫」も同時に設けられた。「北海道」という名称は島の北側の「北海道」と呼ばれた地区にこの一般寮があることに由来する。（北川監修，2014）

(10) 4.1項の記述については2013年5月11日，13年6月8日の高橋氏への聞き取り，14年2月10日，14年4月21日の泉氏への聞き取り，14年2月23日のD氏への聞き取り，14年2月23日のE氏への聞き取り，高橋氏のブログ（高橋，2009），やさしい美術プロジェクトによる報告書「やさしい美術平成22年度大島での取り組み活動報告」『青松』1968年2月号をもとに筆者が再構成した。

(11) 2013年5月11日高橋氏への聞き取りより。

(12) 2014年3月24日C氏への聞き取りより。

(13) 「大島に暮らす」展の中で展示された映像作品「おはしのはなし」の中でのD氏の語りより。映像作品「おかしのはなし」の中では3名の入所者がそれぞれ自身の知るろっぽうやきについてのエピソード，製法などを語っている。

(14) 2014年2月23日D氏への聞き取りより。

(15) 2014年3月24日C氏への聞き取りより。友園交歓の際，大島を訪れた他園の入所者がろっぽうやきを多数購入して帰るなど，名物としてのろっぽうやきのエピソードが複数の入所者により語られている。

また泉氏は，加工部で製造に携わっていた女性から，ろっぽうやきの形が悪いとKさんから「こんなの駄目だ」と注意を受けたというエピソードを聞いている。Kさんのこだわりからも，加工部がろっぽうやきの質に留意して製造を行っていたことがわかる。（2014年4月21日泉氏への聞き取りより）

(16) 大島青松園におけるやさしい美術プロジェクトの取り組みを調査をした小坂は入所者への聞き取りから，ろっぽうやきが現在の入所者間の新たな社会関係をもつなげていることを指摘している（小坂，2014）。ろっぽうやきをめぐって入所者間で新たなつながりが構築される理由を考えたとき，ろっぽうやきが辛さや苦しさではなく，楽しみを伴った主体的営為を想起させるからこそ，それをめぐって入所者たちは積極的に関わりあうと言えるのではないだろうか。

(17) 「GALLERY15」では2010年の会期中に5回の企画展が開催されたが「大島に暮らす」展は「大島の身体」展と同時に第5回目の企画展として実施された。

(18) 2013年にカフェシヨルの運営がこえび隊に引き継がれた後，ランチメニューは休業中であるが，大島でとれた果物等を使用したメニューが継続中である。

(19) 以下の趣味耕地をめぐる記述は2014年2月23日E氏への聞き取り，『青松』1955年10月号，『青松』1968年2月号，『青松』1968年12月号，『青松』1974年12月号，および（香川県健康福祉部，2003；国立療養所大島青松園，1960）による。

(20) 『青松』1966年8月号随筆「西瓜の味」より。F氏は2010年のオープン後シヨルを訪問するようになる。

(21) 『毎日新聞』2011年3月2日「話」より。

(22) やさしい美術プロジェクトによる報告書「やさしい美術平成22年度大島での取り組み活動報告」，高橋氏のブログ（高橋，2010a），2013年6月8日の高橋氏への聞き取りより。「大智×東條展」は

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for Environmental Sociology

「GALLERY15」における5回にわたる企画展のオープニングを飾る企画として実施された。

(23) 『青松』1955年10月随筆「趣味耕地」より。

(24) 農作物の作り手である入所者にとって，生産物を他者に貰ってもらえること，そしてそれが喜ばれることは自己存在の肯定が確認される出来事であったと言える。

(25) 一方で，アートプロジェクトはハンセン病療養所における記憶の伝承のあらゆる側面をすべて担うことができるわけではないという点にも留意しておく必要がある。アートプロジェクトを媒介として療養所内のさまざまなものを呈示するにあたっては，その展示手法をめぐって次のような課題も提起されている。歴史学者である阿部安成は，2013年の芸術祭におけるつながりの家の取り組みの1つである資料室を訪れ，そこに展示された書籍や木工品の数々についての情報説明がないことを惜しみ，展示解説シート設置があった方がよかったのではないかと述べている（阿部，2013）。高松市は2014年に大島振興方策を策定し「歴史の伝承」を柱の1つとしている（高松市，2014）が，このような流れの中でアートプロジェクトが歴史の伝承の何をどこまで担うべきかについては今後検討を重ねていく必要がある。

文 献

阿部安成，2013，「海きて，島みて，島知って――療養所の島を会場とする瀬戸内国際芸術祭2013観察記録」『滋賀大学経済学部 Working Paper Series』189.

青山陽子，2014，『病いの共同体――ハンセン病療養所における患者文化の生成と変容』新曜社.

有薗昌代，2008a，「国立ハンセン病療養所における仲間集団の諸実践」『社会学評論』59(2)：331-348.

――――，2008b，「『生活者』としての経験の力――国立ハンセン病療養所における日常的実践とその記憶」桜井厚・山田富秋・藤井泰編『過去を忘れない――語り継ぐ経験の社会学』せりか書房，104-120.

東浩紀，2013，「観光地化の現実を知る」東浩紀編『福島第一原発観光地化計画』ゲンロン，26.

井出明，2013，「ダークツーリズムから考える」東浩紀編『福島第一原発観光地化計画』ゲンロン，144-157.

泉麻衣子，2015，「おかしのはなし」，(2015年9月16日取得，http://www015.upp.so-net.ne.jp/suseri/page01.htm).

香川県健康福祉部，2003，『島に生きて（上巻）』香川県健康福祉部.

片桐新自，2000，「歴史的環境へのアプローチ」片桐新自編『歴史的環境の社会学』新曜社，1-26.

木村至聖，2009，「産業遺産の表象と地域社会の変容」『社会学評論』60(3)：415-432.

北川フラム監修，2010，『瀬戸内国際芸術祭2010公式ガイドブック』美術出版社.

――――，2014，『瀬戸内国際芸術祭2013』美術出版社.

小坂有資，2014，「ハンセン病者の社会関係の現在――大島青松園と瀬戸内国際芸術祭2010に着目して」『保健医療社会学論集』24(2)：27-37.

桑畑洋一郎，2013，『ハンセン病者の生活実践に関する研究』風間書房.

国立療養所大島青松園，1960，『大島青松園五十年誌』国立療養所大島青松園.

国立療養所大島青松園創立百周年記念誌編集委員会編，2009，『国立療養所大島青松園創立百周年記念誌』国立療養所大島青松園.

小川伸彦，2002，「モノと記憶の保存」荻野昌弘編『文化遺産の社会学――ルーブル美術館から原爆ドームまで』新曜社，34-70.

荻野昌弘，2000，「負の歴史的遺産の保存――戦争・核・公害の記憶」片桐新自編『歴史的環境の社会学』新曜社，199-221.

――――，2002，「文化遺産への社会学的アプローチ」荻野昌弘編『文化遺産の社会学――ルーブル美術

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for Environmental Sociology

館から原爆ドームまで』新曜社，1-33.
坂田勝彦，2009,「戦後日本の社会変動とハンセン病者による現実の意味構成――ある都市部療養所における『ふるさとの森』作りの取り組みから」『社会学評論』59(4)：769-786.
――――，2014,『ハンセン病者の生活史　隔離経験を生きるということ』青弓社.
関礼子，2003,『新潟水俣病をめぐる制度・表象・地域』東信堂.
高橋伸行，2009,「大島 けずり」，ディレクター高橋伸行のブログ，2009年10月3日，(2015年9月16日取得，http://gp.nzu.ac.jp/directorblog/?m=200910&paged=2).
――――，2010a,「大島 新年会」，ディレクター高橋伸行のブログ，2010年1月9日，(2015年9月16日取得，http://gp.nzu.ac.jp/directorblog/?m=201001&paged=2).
――――，2010b,「これがやりたかった」，ディレクター高橋伸行のブログ，2010年9月25日，(2015年9月16日取得，http://gp.nzu.ac.jp/directorblog/?m=201009).
――――，2010c,「大島のその後」，ディレクター高橋伸行のブログ，2010年11月11日，(2015年9月16日取得，http://gp.nzu.ac.jp/directorblog/?m=201011&paged=2).
高橋伸行・井口弥香編，2010,『やさしい美術プロジェクト活動報告書平成19年度－平成21年度』名古屋造形大学現代GP.
高松市，2014,『大島振興方策』高松市.
渡邊英徳，2013,「記憶を伝える」東浩紀編『福島第一原発観光地化計画』ゲンロン，48-52.

（みやもと・ゆか）

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for Environmental Sociology

The Possibility of Passing Down Living Practice in a Negative Historical Legacy:

A Case Study of an Art Project in a Leprosy Sanatorium

MIYAMOTO Yuka

Shiga University

2-5-1 Hiratsu, Otsu-shi, Shiga, 520-0862, JAPAN

In recent years, while moves to preserve and open to the general public diverse forms of architecture and natural or historic landscapes have gained momentum, negative historical legacies passed down from generation to generation as memories of events such as wars, disasters, pollution and discrimination have particularly been attracting public interest. Since a historical legacy involves various factors, controversies over which of those factors should have light shed upon them have been intensifying. This paper presents a case study of a leprosy sanatorium, which has conventionally been viewed as an example of negative historical legacy in terms of discrimination.

With regards to previous studies on leprosy sanatoria, it has been pointed out that a major drawback is "narratives of suffering are established in an overwhelmingly dominant position, forcing various uncollected narratives to be discarded." In the processes of preserving and opening to the public a leprosy sanatorium, the question of "how to pass down the positive experience of the voluntary work of inmates in the leprosy sanatorium, which is apt to be discarded in the face of increasingly dominant narratives of suffering", needs to be answered. This paper attempts to answer this question in a case study of activities to preserve and open to the public a leprosy sanatorium through an art project held there on the theme of diet. An analysis of efforts at Café Shiyoru on the theme of tasting Oshima Island, which was one of the axes for those activities, revealed that they skillfully represented multiple ways of living practice over diet as voluntary work with pleasure and inherited diverse experiences of the inmates in the leprosy sanatorium, which had been apt to be discarded. In view of the diversity of stories narrated by inmates in the leprosy sanatorium, it should be possible to vitalize efforts to express voluntary work through various measures, including art projects.

Keywords: Leprosy Sanatorium, Art Project

NII-Electronic Library Service